

この地名なぜ！

地名にまつわる歴史 (9)

鳴子・長根台・ほら貝界隈

◆このシリーズは「この地名なぜ！」として地名にまつわる歴史を見てきました。紹介できなかった地域をまとめてこの号で終えたいと思います。このシリーズに関心や多くのご意見、ご紹介などをいただき、ありがとうございます。

◆新海池は、「こいのみいけ」と読み、緑区内で最大のため池です。新海五平治が寛永11(1634)年に造ったことでその名が付けられ、当時の鳴海村に12カ所造られた雨池のうちの一つで、堤土手が少なくて広い池でした。その賞(ご褒美)として「土地より池懸りの田からの稲一把ずつをもらい受けたい」と願い、許されました。以来、新海池の水を利用する田主より、収穫の度に稲一把ずつ得たといわれます。



現在の新海池は、区民の憩いの散策場所となっています



螺貝池には、かつて「ヨシゴイ」が飛来していた

この頃、鳴海村では田畑の用水の整備がされた時期で、用水は農作物の生産に欠かせず、水利は耕作地にとり重要な役割を果たしていました。『鳴海宿諸事留書帳』には、新海池の堤は長さ52間、根敷(堤の底幅)は15間、高さは3間、馬踏(馬に踏まれてできた道)は3間半とあります。

現在は、14種類ほどの野鳥が飛来しバードウォッチングを楽しめます。

◆螺貝池は「ほらかいけ」と読み、『尾張徇行記』には「螺谷池」と記され、地形を示す「谷」が使われていました。池は正徳5(1715)年春に造られ、堤長さは83間で、広さは時代により異なり、最近では南部が埋め立てられ狭くなっています。夏には渡り鳥「ヨシゴイ」が飛来していましたが、最近は見かけることがないようです。



戸笠池から笠寺・戸部の村に送水された

◆戸笠池・藤川池(鳴古池)は、緑区と天白区の境にありました。南区の戸部村と笠寺村の両村の水利のため造られた池です。戸笠池の築造年は不明ですが、両村の名前の一部をとり名付けられました。



現在の鳴子池(2つの名を持っていた)

藤川池は享保10(1725)年に造られました。両池の水路は野並橋付近で天白川の下を通る伏越樋(ふせこしひ:暗渠)で造られていました。この伏越樋は松材で造られ、横2尺、縦3尺の箱型の樋と思われ、川の底に埋めて水を通すことをいいます。現在の鳴子池は、『尾張徇行記』によると、野並村では「鳴古池」と呼び、鳴海村では「藤川池」と呼ばれていました。後に「鳴子池」と呼ばれるようになりました。

地震対策 あなたは大丈夫？ 停電に備えよう！！

昨年日本は、大型台風や山崩れ、洪水などあらゆる災害が起こりました。

また、北海道の大地震では北海道全体停電する事態まで起きてしまい、改めて、日ごろから真剣に災害への備えを整えておく必要があると思います。

災害時の電源として、蓄電池システムや電気自動車を利用するのには、まだまだ普及していく途上にありますので、身近なLEDライトや乾電池を上手に活用できるよう、いま一度、点検や補充をしておきましょう。



ふんわりやさしい光が広がります